

現代短歌分類辭典

第百拾一卷

津 端 亨 編 纂

津 端 亨 編 纂

現代短歌分類辞典

第百十一卷

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

現代短歌分類辭典

111

昭和五十九年十一月十八日發行 定價 二、二〇〇円

著者發行
兼印刷者

津 端 亨

東京都台東区鳥越一―十一―八

發行所 現代短歌分類辭典刊行所

〒 111

代表 津 端 亨

振替 東京 三一九三一―四番
電話 〇三(八五二) 九八六九番

目次

(第百十一卷)

	歌数	頁数		歌数	頁数
うきいづ	一	一	浮鴨	一	八
うきいづる	三	一	浮木	九	八
うきいで	一	二	浮標	一	九
うきいで—くれ	一	二	浮霧	六	九
うきいで—し	二	二	浮草	四	一〇
うきいで—て	二	三	浮雲	六	一五
うきいで—に—けり	四	六	浮水母(うきくらげ)	一	三
うきいで—ぬ	二	六	浮き来る	二〇	三
うきいで—む	一	六	うきくれ	一	四
うきうき	一	六	うき—けむ	一	四
うきうきしき	二	七	うき—けり	一	四
うきうきしけれ	一	七	うき—けれ—ば	一	四
うきうきと	一	七	浮腰	一	五
うきうごく	一	八	浮きこず	一	五

浮巢	浮洲	浮城	うきじるし	浮島が原	浮島	うきしにーて	うきしづむ	うきしづみゆく	うきしづみーつつ	うきしづみせーり	うきしづみする	うきしづみしーて	浮き沈み	うきーし	浮棧橋	浮早苗
二	八	四	一	七	二〇	一	七	三	三	二	三	二	二〇	九	一	一
四	三	三	三	三	三	九	九	六	六	七	七	七	六	五	五	五

うきたちーにーけり	うきたちーて	うきたちーし	うきたち	うきただよへーる	うきただよへーり	うきただよひーて	うきただーせーけり	うきたたーせーけり	うきたたーせ	うきたたーず	うきたたす	浮き	浮宝	うきそめーにーけり	うきそめーて	浮瀬浮世
二	二	一	二	四	五	二	一	一	三	一	三	二〇	一	一	一	三
四	四	九	九	九	六	六	六	六	七	七	七	五	五	五	四	四

うきたちーぬ

浮きたつ（終止符）

浮きたう（連体形）

うきたてーり

うきたてーる

浮田秀家

うきたまる

うきたーり

うきーたる

浮樽

うきーたれ

うきーつ

うきしづみーつ

うきつつ

うきーつつ

うきーつーながれーつ

うきーつーも

一

六

一七

一

二

一

一

一

三

二六

二

一

一

三

一

一

一

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

うきーつーもぐりーつ

うきつらなりーて

浮釣木

うきーて

うきでーし

うきでーて

うきでーぬ

浮灯台

浮殿

浮きドック

浮き鳥

浮名

浮苗

うきーながら

うきーにーけり

うきながれゆく

うきならぶ

一

一

一

一

二

二

二

二

一

一

一

一

二

一

一

一

一

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

迂愚

うくーごと

うくーごとき

うきーごとき

うくーごとし

宇久須

うくーたから

うくーと

受くーとふ

浮くーとふ

うくーなし

うくーなり

うくーなる

迂愚に

うくーは

うくーばかり

うぐひ

一四 一 六 一 一 四 二 一 一 二 一 二 二 五 二 一 一

一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三 一三

うぐひかは

うぐひす

うぐひすいろ

うぐひすかぐろ

うぐひすかご

鶯谷

鶯菜

鶯の笛

鶯張

鶯笛

うぐひすーらしき

うくーべからーざる

受くべき

浮くべき

受くーべし

受くれーば

⑦ うくる

一 一六三 三 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

一七 一七 一七 一七 一七 一七 一七 一七 一七 一七 一七 一七 一七 一七 一七 一七

うくるーと
 うくれーども
 うくるーに
 うくるーは
 うくれーば
 羽花
 右廻
 うくわしつづけーぬ
 うくわいしーきたり
 うくわいしーたり
 うくわいしーつつ
 うくわいしーて
 うくわいす
 うくわいする
 うくわいせーる
 迂回路
 うけ(浮標)

一 一 一 三 一 三 一 一 一 一 一 三 三 一 一 一 五
 二六 二六 二六 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九

うくわつな
 うくわつに
 羽化登仙
 有願
 鵜群
 受け
 受け
 受け(連用形)
 うくーも
 浮くーも
 ウクライナ
 うくーらむ
 浮くる
 受くる
 受け
 受け
 有碍(うげ)

一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 二六 二六 二六 二六 二六 二六 二六 二六 二六 二六 二六 二六 二六 二六 二六 二六

うけあそぶ	一	二九
うけあふ	二	二九
うけあまし―たつる	一	二九
うけいれ	一	二九
うけいれ―がたき	一	二九
うけいれ―ず	一	三〇
うけいれ―て	一	三〇
うけいれ―よう	一	三〇
うけいれ―られる	二	三〇
うけいれる	一	三〇
受売り	一	三〇
うけおき―て	一	三〇
請負仕事	一	三〇
うけおひ―て	一	三〇
うけ―がたし	一	三〇
うけ―がてに	二	三〇
うけ―かねる	一	三〇

請川	一	三〇
うけがは―ず	一	三〇
うけがひ―つつ	一	三〇
うけがふ	一	三〇
うけかへす	一	三〇
憂けき	一	三〇
受け―き	二	三〇
うけき―し	一	三〇
うけ―きれ―ない	一	三〇
受けく	一	三〇
憂けく	五	三〇
うけ辰に	一	三〇
穿靴	三	三〇
うけく―も	一	三〇
泛けくる	一	三〇
うけこたへ	二	三五
うけこたへする	一	三五

うけたまはりゝぬ

うけたまはる

うけ—たまひ

うけ—たまひ—ける

うけ—たまふ

うけ—たまふ—らむ

うけ—たまへ

うけ—ため—し

うけ—ため—て

うけ—たら—め

浮け—たり

受け—たり

受け—たり—き

浮け―たる

受け—たる

受け—たれ—ど

受け—たれ—ば

請地

浮けーっ

受け—つ

受けつい—だ

うけつがーむ

うがつかん

受けつぎ

承けつぎし

受けつぎきたる

受けつぎ—し

受けつぎ—て

うけつぎにけり

うけつきぬらし

受付係

うけつぐ

受
付

うけつけ—ず

うけつげーる

浮けーつつ

受けーつつ

雨月物語

受けーつる

受けーつれーば

浮けーて

受けて

合 計

四、〇三首

二

四

三八

二

二

一

五〇

二六

三三

三五

三五

三九

三九

三九

三九

三九

夕づきて昏みかかれば満開の山茶花の花庭に浮出づ①

うきいづる【動詞】

暁のまだ暗きより浮きいでて木槿むくげの花は咲きいづる見ゆ（霜）

朝霧の中に浮きいづる山門の丹塗に對ふ心豊けく

朝風げる海面にをりをり浮きいづる鶺鴒あひだりの鳥は白き腹を見せつつ②

驚きかづきしあとに立つ波の輪よりはなれて浮きいづる鳩③

大空の暗きに流る風の音に誘はれて浮き出づる悲しみ

すでにして日のかがやきに雪かづくとほの山々浮きいづるころ（白き山）

台が嶽長尾の溪の浮き出づる箱根の奥の月明の幅④

爪をもて書けば緒しよの字の浮きいづる貝多羅の葉をわれ尊みき④

遠き町のあかりかがよふ灯を消せば壁に浮きいづる百合の花影

なにやらむさびしき笑ひ浮きいづる片頬にあてぬつめたき木の実⑤

うきいづ

中井 コツフ

齋藤 茂吉

井上 清

広野 三郎

金子 元臣

金子 不泣

齋藤 茂吉

與謝野 晶子

高橋 希人

武田 祐吉

若山 牧水

うきいづる

まれまれに磨く手錠か浮きいづる馬蹄形指紋われのなにゆび○

み堂の床に蠟涙かぎりなく浮きいづるまで献燈ともる⑤

水無月の朝たけゆきて浮きいづるうす雲のかげに秩父山見ゆ

うきいで【動詞】

水仙の株間に鶏かよまらあさり居て花を浮き出でとさか揺れ立つ⑤

うきいで―くれ【動詞・動詞】

頭脳あたま悪くかなしきなれど良きことのたまに一つは浮き出でもくれ①

うきいで―し【動詞・助動詞】

えきぞちつくなおもひこそ湧け白象の浮き出でし臆ろうけちびやうぶ瀨屏風を見れば③

暮れてゆく四月の空に浮き出でしきちがひじみしわが恋すがた②

紺碧の波の底よりうきいでしわれと思ひ春の海みる①（現代短歌大系）

提灯の火に浮きいでし船頭のたなぞて大き掌に銭を握らす（新萬葉集二）

御供平 侔

遠山 光栄

若山 牧水

吉野 秀雄

前川 佐美雄

安田 章生

近藤 元

九條 武子

安部 豊

つね対ふ山の秀ながら夕空に浮き出でし見れば截れの鋭さ（新萬葉集二）

伊藤 千鶴子

掌の甲の皺にうき出し年令のしみ人に握らす年ならねども①

桐田 蔭村

波の間にぼつかり浮出し黒き頭^づや潮の香にぬれて海の陽^は弾^ぢく

宇都野 研

はづしたる黒くふるびし表札のうきいでし文字をなでてゐにけり

橋本 徳寿

表紙絵は水平線に浮き出でしその瞬間の白き太陽

四賀 光子

山の上の平地を匍ひて吹き寄せくる霧にうきいでし樺の白幹⑦（現代短歌大系）

尾山 篤二郎

夜の灯に浮き出でし藤は蝶つどふかたちとも見えあまた咲き垂る①

滝口 英子

うきいでして【動詞・助詞】

秋陽射し明闇なせば浮き出でて笑ますがに見ゆ古りし仏ら②

葉山 耕三郎

朝明けのま青き空に浮き出でてすでに匂へり富士の高根は（新萬葉集二）

奥村 玉枝

あは路しま影ゑのごとくうきいでて雲は明石沖にただよふ（新年御歌会始）
（新萬葉集別）

賀陽宮妃敏子

雨やみて夕あかりさす庭すみの牡丹のはなは浮きいでて見ゆ①

生駒 あざみ

うきいでし